

## 今昔物語集の「繚」

——自動詞と他動詞の間——

山 口 康 子

今昔物語集の「繚」字は、訓み・語義・用法ともに今のところ明確には解明されていないようである。本稿は、特に語義・用法の面において若干でもそれを明らかにしようと試みるものである。

### (一)

「繚」字の訓みについては、日本古典文学大系本「今昔物語集」(一)、補注四八四ページにおいて、類聚名義抄「結繚マツハル・アツカハシ」(観智院本・法中一一二)に準拠する「アツカフ」の訓を提示されて以来、それに従うが一般の如くである。

今昔物語集中、「繚」字六三字、及び同訓とみてよいと思われる「療」(巻二〇第11語、166ページ2行。以下「二〇—11、166ペ2」の如く、略記して示す。以下同じ。)<sup>1)</sup>「結」(一五—22、374ペ16)各一字をも含めて、計六五例が、今昔物語集において「アツカフ」の訓が考えられる全例である。現今一般に用いられている「扱」などの文字は今昔物語集にはみられない。今、この六五例を検するに、送り仮名の認められるのは、「繚ハセケル」(二四—50、348ペ2)など未然形二例、「云ヒ繚ヒ咲ケルトナム」(二九—19、190ペ14)など連用形三例、「妻夫シテ繚フ」(二六—5423ペ15)など終止形二例、「繚フ人モ无クテ」(二八—20、86ペ14)など連体形八例今昔物語集の「繚」(山口)

であって、これによれば八行四段活用動詞であることが示されるにすぎず、「アツカフ」とともに、旧訓「ワヅラフ」「シラフ」などの可能性は勿論認めざるを得ない。

「繚」字本来の意義は、「纏也・繞也・紆也・縛束也」などの如くであり、日本書紀にみる次の用例の「繚」字は正用といえよう。

・繚以周田、決渠降雨。(天智元年十二月條)

この「繚」は日本古典文学大系本において「めぐらす」と訓じられているが、これは、類聚名義抄にもみる訓である。

名義抄に「繚」は「縋」の俗字・通字としてあげられている。

「縋」には「イトヨル・モトル・モトホル・シハル・メクル・メクラス・マツハル・ヒ・ル・ユフ」の訓が付され、俗字・通字を掲げた後に続けて前掲の「結繚」が「マツハル・アツカハシ」の両訓をもって記載されている。たまたま今昔物語集に一例だけではあるが「結」字をもって他の「繚」字と全く同じ用法に用いている例外が、むしろ、この名義抄の「結繚Ⅱアツカハシ」との結びつきを示唆しているとも考えられる。

旧訓「ワヅラフ」は所拠不明であり他の適切な訓も見出し難いままに、今、日本古典文学大系本(岩波)、日本古典文学全集本(小学館)の訓みに従い、本稿においても「アツカフ」の訓を採

り、「繚」の語義・用法の検討に入ってゆきたい。

## (二)

「繚」字本来の語義・用法と、今昔物語集におけるそれとは直接的な関係がないらしく、名義抄にみる「結繚」などを媒介に「繚」字が「アツカフ」と結びついたものであるらしいことを(一)に述べた。以下は、訓みを四段動詞「アツカフ」と考えた上での語義・用法の検討である。

「繚」字は、今昔物語集において単独で動詞として用いられる他、「思」「云」「見」などの動詞に下接して複合動詞として用いられている例が多い。全六五例の「繚」字は、単独動詞二〇例、複合動詞四二例、名詞二例、形容動詞一例に用いられ、複合動詞としての用例が七割を占め、そのうち僅か一例を除く計四一例までが複合動詞の第二項として用いられている。

ところで、これらの用例の語義については現在のところ文脈に従ってその用法を見定めそれぞれに解釈されていて、時には相反するが如き意義にさえ受けとられているようである。

例えば、今昔物語集中四例を数える「見繚」の事例について検討してみよう。

①猶責ニ、此ヲ見ル人共、見繚テ、彼ノ母ノ借ル所ノ稻ヲ員ノ如ク弁ヘテ、母ヲ不令責ズ成ヌ。(巻二〇、大和国人、為母依不孝得現報語第卅一、194ペ9行)

文中「此」は、大和国添上郡に住む学生、贍保が母に貸した稻を償わせようと強ちに責め言うことを指す。母を地に座らせて責め徴るその場を人々が「見繚」って、母親の代りに稻を弁償して

助けるが、贍保は結局、この不孝の現報を得て遂に飢死する。当該「見繚」について大系本頭注「見るに見かねて」、全集本頭注「見るに見かねて。『繚』ここでは処置に窮する意。」

②「水ニ流レテ行ク間ニ火ニ焼テ死ヌル、奇異ク難有キ事也」ト見繚ケル程ニ、其ノ中ニ二十四、五歳許ナル童ノ、火ヲ離テ水ニ踊入テ流レテ行ケレバ (二六―3、美濃国因幡河出水流人語、第三、412ペ17行)

因幡河の出水の時、家が流されてゆく間に火災が起り、屋上にのがれた人々が大水にとりかこまれながら焼死するという稀有な不祥事に驚き呆れ、人々が「見繚」っているうちに一人の少年が火中から水中に飛びこみ、結局、大水で水位が上っていたために崖の途中に生えていた大木に引っかかって辛うじて一命を存し得る。大系本頭注「兎角することもできないまま、打ち眺めている」と、全集本頭注「どうしようもないままに、見物しながらあれこれ取り沙汰する意。」

③路チ行キ違フ者共此レヲ見テ、「此ハ何ニシテ死タル者ニ力有ラム、疵モ无キハ」ト見繚ヒ云ヒ喟ケル程ニ (二九―19、袴垂於関山虚死殺人語第十九、170ペ14行)

文中「此」は、裸で虚死している椅垂を指す。裸で行き倒れている人を見て往來の人々が「見繚ヒ」騒いでいる時、心ある武者は用心しつつ傍にも寄らず行き過ぎるが浅慮者が無用に近づきあたたら一命を落す。大系本頭注「物見高く打囲み」、全集本頭注「人々が回りを取り囲んで、のぞき込んだり指さしたりすることとをいう。」

④聞ケバ、「死ノ耻ヲ隠サセ給タル事、世々ニモ難忘ク候フ。然許人ノ多ク見ムトテ集テ候ヒシニ、西ヨリ出サセ不給ザラマシ

カバ、多ノ人ニ被見縊テ、極タル死ノ耻ニテコソハ候ハマシカ」ト云テ泣々手ヲ摺テ喜ブトナム見エテ夢覺ニケル。(三一)

一29、藏人式部極貞高、於殿上俄死語第廿九、298 ペ5行)

殿中に頓死した藤原貞高が小野宮実資のはからいで人々に「見縊」われることもなく、死耻をさらさずにすんだことを喜び、夢にあらわれて感謝する。大系本頭注「多くの人のさらし物になって」、全集本頭注「さらし者にされて。『見縊』は、見てあれこれ取り沙汰すること。」

今昔物語集卷二〇、卷二六、卷二九、卷三一に各一例ずつ見出される「見縊」は右の通りであり、大系本・全集本の頭注を参照すると右の如く文脈に応じた解釈がなされており、一見、相反する如き用法を持つかにさえみえる。しかし、場面や文脈による解釈はともかく、同じ「見縊」に共通する意義の要素は見出されないものであるうか。私は、この四例に共通するのは、「見るに見かねる」という、見ている人々の憂慮の気持であると思う。なるほど、例えば、①と②の「見縊」は①の場合は人々が見るに見かねて救いの処置をとるに對し、②の場合は洪水中の火災という処置に窮する場面で人々はただ手をこまねいて見守るしかないという違いはあるが、「見ていられない」という人々の気持は共通であるう。③の場合も、裸で行き倒れ、死んでいるかにみえる人を見て往來の人々が余りのことに「見るに見かね」、黙過できず騒ぎ合っている場面といえる。④は、「被」字を上接し、受身形であるが、参集した多数の人々から「見るに見かねられる」こと、すなわち、殿上での急死に加えて死体運び出される際人々に見られてその上にも死耻をさらすことを恐れ、それが避けられたことを喜んでいるのである。運び出される死体を見ようとして集っ

今昔物語集の「縊」(山口)

た多数の人々は、無惨な頓死者を「見るに耐えない」気持で見るところ実資の機智により肩すかしをくったわけである。

この四例の「見縊」の用いられている場面の共通項をあげれば、死などの極限的な状況の中に多数の人々がそれを見守っているという場面である。四例中、②③④の三例までが生死にかかわる場面であり、残る一例①は子が母を責めるという信じ難い不孝の場面で、かつ主人公はその現報によって死を得ている。その場面に用いられている「見縊」に共通する意義の要素としては、見ている人々の「見るに見かねる」憂慮の気持であろう。

以上、「見縊」にみた如く、文脈の中で一見全く相反する用法の如くみなされる場合でも、一つの語には何らかの共通の意義の要素を見出し得る筈のものであると考えられる。

ところで、「縊」の用例の大半を占めた複合動詞第二項の「縊」が「見縊」にみた如く「ししかねる」意で解し得るかというところ、どうやらそれはやや無理のようである。

例えば、

⑤仲珪ガ父、資陽郡ニシテ身ニ病ヲ受タリ。子ノ中珪、帶ヲ不解ズシテ父ノ所ニ行テ、懇此レヲ養ヒ縊フ。(七一27、156ペ2行)

⑥十五、六歳ニモ成ケレバ右近小將□ノ□ト云ケル人ノ、年若ク形チ美麗ニ心ヘ可咲カリケルヲ聳ニ取テ傳縊ケル事無限シ。

(三〇—6、228ペ17行)

などにおいては、それぞれ「養いかねる」「傳きかねる」意ではあり得ず、「懇」「無限シ」などの語からも、むしろきわだつて「養いつくす」「傳きつくす」の意がうかがわれる。これらの「縊」は「養」「傳」と同義もしくは類義のようにも受けとられ、「誠心誠意、真心をつくして」「養」「傳」の行為にあたっ

たことが表現されているものと考えざるを得ない事例である。そうしてみると、「繚」全体に共通する意義の要素が果して見出されるものであるのだろうか。

(三)

今昔物語集の「續」六五例を文脈に従つてその語義・用法を判断して分類してみると、次の第一表の如く整理できよう。

用例の一例の説明は紙幅の都合上省略するが分類の実際については、日本古典大系本の所在ページ数・行数をもって、末尾に補記することにより示したい。

(第一表)

[illegible]

第一表によれば、単独動詞「繚」にはいろいろな語義・用法があるが、複合動詞となる場合には、その語義・用法と上接第一項動詞との間にきわめて密接な関係があることを看取できる。以下の如くである。

①(a)整える・処理する・とりはからう、の用法（これが現代の「扱う」にもっとも近い語義と思われる。）の場合、複合動詞を作ることがない。

②一つの複合動詞は一種類の語義・用法しか持たない。例えば「思」と複合する「思繚」は計一八例にも及ぶが(d)困惑する・処置に窮する・もてあます、の用法に限定され、二用法にまたがることはない。

③同義語・類義語を整理して目立つところをまとめれば次のような関係がみられる。

△云繚・申繚―(c)噂する・取り沙汰する。

△養繚・傳繚―(b)世話する・看病する・養育する。

△思縲——(d)困惑する・処置に窮する・もてあます。

第③点を更に考えてみると、右の複合動詞の場合それぞれ同義・類義的な語を重ねて作られているといえるようである。すなわち上接第一項動詞の中にすでに存する意味・用法を「繚」は、同義語反復的に強めているとでもいい得るだろう。「云」「申」には場面によっては「噂する」「取り沙汰する」の意味が含まれてくる筈である。今昔物語集の用例を見ると「繚」単独でもその意味に用いられているが「云」「申」と重ねることにより更にその意味を強めているかにかがえる。

然るに先に(一)において考察した「見緯」の場合の如く「よしかなる」の意的補助動詞的な「緯」は右の説明に合致しない。この

用法は上接語が「見」の他は「求」「巾」の場合にしかみられないが、例えば「見」には、「面倒をみる」「病気をみとる」といった第一表の(b)にあたる語義・用法があるにもかかわらず、「見縗」四例はいずれも「見」のその用法を同義反復的に重ねたものではない。前述の如くいずれも「見るに見かねて」「見ていられなくて」という表現、いわば、上接動詞「見」を部分的に否定した用法と考えるのが妥当な例ばかりであった。又、「巾縗」は、汚ないものが衣類(二八―五、66―10行)もしくは身体(二八―34、110―6行)にかかって拭いきれずにあわてる描写であり、「求縗」(二七―62、514―8行)は四方に手をつくしても居なくなった牛を探し出しかねている様子である。いずれも「ししかねる」という状態の表現である。これらの場合は同義語・類義語の反復による強調的な複合動詞とは説明し得ないであろう。

ところで第一表にあらわれてきた(a)と(d)(複合動詞的な(e)は今除外して考える)の「縗」の語義に共通している意味はないものか、各語義・用法の相互の関係を考えてみると、「縗」のすべての用法には「ある外的な事態に対し何らかの形でかかわる。」という点で共通項が見出されるようである。すなわち、

- (b)(a) 手でもってあれこれとその事態にかかわる。
  - (c) 口でもってあれこれとその事態にかかわる。
  - (d) 心でもってあれこれとその事態にかかわる。
- ということになる。とすれば(d)の展開として、その事態に、心・気持でもってあれこれとかかわりながらも、いかんともしがたい場面であれば、処置に苦しみ、事態をもてあました挙句、「ししかねる」という(e)の補助動詞的な用法は、自然に内包されてこよう。

「見縗」「巾縗」「求縗」などにみた補助動詞的な用法は、(d)の内部に内包されていたものが発顕したという形で展開・派生したもののであり、旧訓「ワヅラフ」が存したのも、「しわづらう」との用法的な接触も、ここから生じたものであろう。

ところで「手」や「口」でもって外的な事態とかかわるという(a)(b)(c)の「縗」は、きわめて具体的・現実的な行為である。然るに「心」でかかわるという(d)(d)に内包されていると考えられる(e)も含めては、内的な思惟・心情の世界であり、精神の行為である。普通に「扱」字をあてる現代語の「アツカフ」にも精神的な趣きはない。この(d)もしくは(e)の用法は、(b)(c)の用法、ひいては現代語にまで続く(a)の用法などどのようなかわりを持って一体どこから生じてきたものであろうか。

(四)

右の問題の解決に先だって「縗」の旧訓「ワヅラフ」について考察しておきたい。「思縗」に関して「思煩」と位相の差があるのではないかという説も既に示されていることでもあり、「思悩む」「思い苦しむ」の語義をもつ「ワヅラフ」との関係をおくべきであろう。

確かに「思縗」「思煩」の巻毎の分布をみると次の如くである。

	天竺	震旦	本朝仏法	本朝世俗	計
思縗	2	0	1	15	18
思煩	6	2	5	4	17

「思煩」が一応全巻にわたって平均的に出現するのに対し「思繚」は本朝世俗に偏っているとはいえる。今これが位相に因するか否かは直接問わぬこととし、語義・用法について検討してみよう。

たしかに「思煩」の場合、「思繚」とほぼ同義といつてよいかの如くである。又、

・女、僧ノ遅ク来ヲ待チ煩ヒテ（一四―3、278ペ4行）

・……ト思テ待ツニ久ク不見エズ。然レバ待煩テ（二六―10、445ペ3行）

の如き「煩」は、明らかに「待ちかねて」の意であつて先に(e)に分類した「求繚」「巾繚」の用法と同じである。

次に前掲第一表の(c)項に相当する事例を検討してみよう。すなわち「云」「申」に「煩」「繚」が複合する場合を比較してみる。前述の如く「云繚」「申繚」の場合、「噂する」「取り沙汰する」の意となり「云(申)」との複合は同義語反復的であつた。「煩」の場合は、

・事ニ触レテ法花ノ法蓮ヲ云ヒ煩ハスト云ヘドモ（二三―40、261ペ11行）

・……ト責サセ給ヘバ、頼光辞ビ申シ煩テ（二五―6、381ペ17行）の如く「言いなやませる」「ご辞退申しかねる」の意であつて前掲の「待煩」などと同じく「ししかねる」「ししなやむ」の意であること明らかである。

単独の動詞として用いられている「煩」はおおむね病氣などについて「患」の意であり、本稿には直接関係がないので触れない。

以上、「煩」が「繚」と語義・用法上近いのは「繚」の場合の

第一表にいう(d)、および(e)の場合のみであつて、(a)(b)(c)の語義・用法は「煩」には認められない。この事實は、一方では「繚」の旧訓「ワヅラフ」を否定し、「アツカフ」を支持せざるを得ない理由の一つともなる。

「煩」との関係については「繚」の用法のある部分、本稿にいう(d)、(e)の用法、すなわち「心」をもってある事態に対応することを示す用法のみが、同義的な用法として接触するだけであつて、「繚」の全体的な語義・用法とのかかわり、又は、「繚」の(d)、(e)用法の発生の要因、もしくは位相の対立などの根の深い関係は考えられないようである。「繚」の(d)、(e)用法の出自は他に求めなければならない如くである。

## (五)

「繚」（アツカフ）の(d)、(e)用法、すなわち精神的な行動を示す語義の要因はどこから生じているのか。結論から先にいえば、私は、それを、上代にのみみられる自動詞「アツカフ」に求めたい。

上代「アツカフ」という自動詞があり、「熱に悶え苦しむ」意に用いられていたことは、ほぼ確実である。上代のこととて表記法の制限上明瞭な和訓はなかなか求めがたいが、新撰字鏡に次の記載がみられる。

「喝 於月反 傷熱也 阿豆加布」（傍線筆者）

万葉集・日本霊異記には、普通訓じられているところに従えば「アツカフ」の語はみられないが、日本書紀には次の四例が見出される。

(1) 伊奘冉尊、且<sub>レ</sub>生火神軻遇突智之時、悶<sub>レ</sub>熱懊惱。因爲<sub>レ</sub>吐。此化爲神。名曰金山彦。

(神代紀上、日本古典文学大系本91ペ傍線、波線、筆者。以下同じ。)  
(2) 妃臥<sub>レ</sub>床涕泣、惋<sub>レ</sub>痛不<sub>レ</sub>能自勝。(繼體紀31ペ)

(3) 於是、大河内直味張、恐<sub>レ</sub>畏求悔、伏<sub>レ</sub>地汗流。(安閑紀53ペ)

(4) 皇太子妃蘇我造媛、聞父大臣、爲<sub>レ</sub>塩所<sub>レ</sub>斬、傷<sub>レ</sub>心痛惋。

(孝德紀311ペ)

これらの「アツカフ」(文中傍線部)は、(1)「悶熱」の如く文字どおりの「熱に悶え苦しむ」ことから、(2)「惋痛」、(3)「汗流」、(4)「痛惋」と、用字からみても身を切られるような「痛み」、「汗が流れるほどの身体的苦痛を伴なう、又はそれにも喩えられる苦しみ」というような、直接又は間接的比喩として、身体的苦痛という自動詞である。そして文中波線を施した(1)「懊惱」、(2)「不能自勝」、(3)「恐畏求悔」、(4)「傷心」の如く、一方にそういう状態に対する精神的な苦痛を表現する語句を併存する。身体的苦痛は、あわせてそういう状態に対する心の苦悶・心痛を伴なうものである。

上代において管見による「アツカフ」の用例は僅か数例のみであるが、「肉体的苦痛」(熱に苦しむ)、もしくは比喩としてそれにも匹敵する「精神的苦痛」(苦しみ悩む)をあらわす自動詞として用いられていると考えてよいであろう。

自動詞「アツカフ」の語源は「アツ(熱)」が考えられているがおそらくはその通りであろう。形容詞「アツシの語幹「アツ」に」、動詞性の語尾「ク」、更にいわゆる継続の「フ」が加わり「アツカフ」が生じたのであろう。そして「熱病」から発して同様な病悩やひいては心労苦悩を「アツカフ」というように展開し

今昔物語集の「繚」(山口)

ていったものであろう。

ところでこの自動詞「アツカフ」はその後文獻に姿を見ない。平安期に入って「アツカフ」の初出例は、円融・花山両朝頃の成立が推定されている宇津保物語にみるが、目的格(を・表示)を伴なう明らかな他動詞例である。以降、十一世紀に入ると「アツカフ」は物語のジャンルを中心に集中的にあらわれるがいずれも他動詞用例であって、昌住が八九八年、新撰字鏡に採録した「喝傷熱也 阿豆加布」に該当する「アツカフ」はその例を見ることができない。本稿に扱う「繚」も又すべて他動詞である。

上代の自動詞「アツカフ」は、平安中期の物語類や今昔物語集などにみる他動詞「アツカフ」と同語なのであろうか。とすれば、「アツカフ」は「熱に苦しむ」という自動詞の用法を失なつて、中古に入る時期、他動詞専用の語としていわば変身をとげているわけである。

この疑問については、ちょうど問題の時期の文献資料に用例をみないのであるから何とも断定の下しようがないわけであるが、かかる変遷が起り得た蓋然性の有無については、中古・中世の他動詞「アツカフ」の用法を検討することによって明らかにし得よう。

以下は、かかる目的による中古以降の他動詞「アツカフ」の用法の考察である。

まず、用例の分布状態をみよう。

第二表にみるとおり、「アツカフ」の用例分布はかなり偏るものの如くである。時代的にも平安中期、宇津保物語以降、今昔物語集ぐらいまででその後の用例は極端に減少している。又ジャンルにも偏りがあり、古今集以下の和歌集には殆んど例がなく、土

(第二表)

計	動詞		あつかひぐさ	あつかひ	あつかはしげなり	あつかはし	
	複合	単独					
4	2			1		1	竹取物語
5	3				1	1	古今集
125	63	32	3	22		5	伊勢物語
33	14	12		7			土佐日記
31	19	10	1	1			大和物語
65	42	20		2	1		落窪物語
1		1					蜻蛉日記
3	3						宇津保物語
2	1	1					枕草子
1	1						源氏物語
1			1				夜の寝覚
							浜松中納言
							今昔物語集
							新古今集
							方丈記
							無名抄
							宇治拾遺物語
							平家物語
							古本説話集
							古今著聞集
							徒然草
							義経記

(空欄は用例のないことを示す)

佐日記以下の仮名日記文学にも用例をみない。

用例数の多い源氏物語を中心に今昔物語集以前の「アツカフ」の語義・用法を検討し、先にみた今昔物語集のそれと比較して、そこに自動詞から他動詞への変遷の動向をうかがいみ得るか否かを考察しよう。

(Ⅰ)単独動詞「アツカフ」の場合

今昔物語集でみた四つの語義・用法

- (a) 整える・処理する・とりはからう
  - (b) 世話する・看病する・養育する
  - (c) 噂する・取り沙汰する
  - (d) 困惑する・処置に苦しむ・思い悩む
- は、いずれも源氏物語を中心とする平安和文類に見出すことがで

(d)' 多く取らむとさわぐ者はなかなかうちこぼしあつかふほどに

(枕一四二)

以上、各語義・用法に一例ずつ用例をひろって見たが、単独の動詞として用いられる「アツカフ」には、今昔物語集にみた様相と大きな相違はみられない。(a) (d)のどの用法が多いかという用法の数値上の分類は、作品内容などの差異を考えれば、ほとんど無意味でもあろうが、傾向としては手や口よりも、(d)心にかかわる用例が多いといえる。

(Ⅱ)複合動詞の場合

複合動詞として用いられている「アツカフ」の場合、中古物語類にみる用例の語義・用法は必ずしも今昔物語集の場合と一致

きる。若干用例をあげれば次の如くである。

(a)' 宮す所の四十九日のわざなど、大和の守なにがしの朝臣ひとりあつかひ侍る、いとあはれなるわざなりや

(源氏、夕霧)

(b)' うちへ、かくあつかふ程に四五日も過ぎぬ

(源氏、手習)

(c)' 人々も思ひのほかなる事かなとあつかふめるを(源氏、紅葉賀)



しない。

・常陸の宮の君は、父親王うせ給ひし名残に、又思ひあつかふ人もなき身にて、いみじう心細げなりしを（源氏、蓬生）

この例は、心にかけて世話をする、すなわち、「思ひ」かつ「世話をする」という形の複合語である。源氏物語の「思ヒアツカフ」計一五例（敬語の形の計七例を含めて、全三二例としても）を検討するに、今昔物語集の場合の如く「思ヒアツカフ」が「困惑する」「処置に窮する」「思い悩む」の如き「思ヒワヅラフ」と同義的な語義・用法で用いられているのは、次の一例のみであると考えられる。

・故宮の御事聞きたるなめりと思ふに、いとど、いかで人とひとしくとのみ思ひあつかはる。（源氏、東屋）

すなわち、源氏物語でいえば「思ヒアツカフ」の「アツカフ」は、「思」と、「アツカフ」の(a)(b)(c)の語義・用法との複合であって、複合語の下接第二項の「アツカフ」は単独動詞としての性格がいちぢるしく強い。

今昔物語集では、ひとしく「見かねる」「見て困惑する」の意で異常な事態に対する人々の憂慮の気持の表現として用いられていた「見アツカフ」も、源氏物語においては、「見て世話をする」「看病する」の意であって決して「見ワヅラフ」と類義にはなり得ない。

・月頃はいろいろの病者を見あつかひ、心のいとまなき程に

（源氏、若菜下）

・人の上になしては、心の至らん限り、思ひ後見てん、みづからの上のもてなしは、又、誰かは、見あつかはん

（源氏、総角）

今昔物語集の「緯」（山口）

の如くである。すなわち、今昔物語集においても一応考えてみたように、「見」に本来、「めんどうをみる」「みとる」などの語義・用法があるところから、その意義を類義語反復的に重ねて複合動詞とした「見アツカフ」なのである。この場合も、「思ヒアツカフ」の場合と同じく、「見」かつ「アツカフ」のであって、「見」と「アツカフ」の関係は対等的であり、「アツカフ」の単独動詞性は強いといえる。

源氏物語にみる「アツカフ」のあらわれ方を分類してみると次の第三表の如くである。

これにみるとおり、源氏物語における「アツカフ」は、今昔物語集のそれに比して、用法が自在であるといえる。形容詞形とその名詞法、名詞形とその複合名詞形、と動詞以外の形でも豊富に用いられているうえ、動詞の場合も複合動詞形の第一項にも第二項にも自由に用いられている。勿論、今昔物語集の場合と同じく第二項になる傾向は強いが、なお源氏物語において「アツカフ」は自由で単独動詞性の強い用法を持っていると言い得よう。

今昔物語集と共通する複合動詞第二項の場合を更に整理してみると次の如くである。

思ふ系（思ふ・思ひ給ふ・おぼす）

22例

見る系（見る・見奉る・見給ふ）

15例

言ふ系（言ふ・聞こゆ・もどく・うちささめく）

5例

この三系で用例の大半を占め、その他には「もてあつかふ」八例がめだつぐらいで、第一項動詞に偏りがあること、今昔物語集の場合と同様である。すなわち、傾向として源氏物語の「アツカフ」と今昔物語集の「緯」とは同一線上にあるとみられるが、源氏物語において用法が自由で広く、今昔物語集において比較的狭

(第三表)

形容詞・名詞	用例数	動 詞	用例数
あつかはし	5	あつかふ	32
あつかはしさ	1	あつかひ後見る	1
あつかひ	5	—おこなう	1
御あつかひ	9	—おもふ	1
子供あつかひ	2	—さはぐ	1
古物あつかひ	1	—しる	1
物あつかひ	2	—そむ	1
御物あつかひ	1	—なす	1
御殿あつかひ	1	思ひ—	15
御孫あつかひ	1	思ひ給へ—	2
あつかひぐさ	2	おぼし—	5
御あつかひぐさ	1	言ひ—	2
		聞こえ—	1
		もどき—	1
		うちささめき—	1
		見—	8
		見奉り—	5
		見給へ—	2
		もて—	8
		聞き—	2
		いだき—	1
		うつくしみ—	1
		とぶらひ—	1

く限定されてきているわけである。複合動詞第二項となる場合の第一項動詞は両者ともに限定はあるが、なお源氏物語において、より自由であるし、「アツカフ」が第一項動詞として複合動詞を作っている例も源氏物語には七例を数える。今昔物語集にも一例だけ複合動詞第一項となっている「縁」があった。

・多ノ糸ヲ縁居タリ。(二六—11、446ペ8行)

この「縁」は「イトヨル」と訓むも可、と日本古典文学大系に注記されても居るし、確かにそれは類聚名義抄にみる「縁」の訓でもあるが、この用例は、同一説話のしかもほんの二行前に「然テ此ノ糸ハ細メ可遣方无クシテ縁フ程ニ」(二六—11、446ペ6行)という用例があり、後の場合には「イトヨル」と訓じる可能性はないので、前例も「アツカフ」と訓じ「困惑する」「もてあま

す」の意と解すべきかと思う。下接動詞が「居」で存在詞である点、他の動詞と若干意味が違うが、なお複合動詞第一項に「アツカフ」が立ち得るという源氏物語にみた傾向が僅かながら残存していると考え得よう。

以上、源氏物語を中心に「アツカフ」の中古用例を検討した結果、源氏物語から今昔物語集までのおよそ一世紀ほどの間に、「アツカフ」の語義・用法にかな

りめだつ変動があり、それは同一線上の傾向として把え得るものと考えられた。源氏物語においては単独の動詞としての性格が強く、複合動詞を作る場合、第一項にも第二項にも自由に立ち得て、同義語類義語の反復による複合動詞となる傾向がうかがわれる。それに対し今昔物語集の場合には、形式的には複合動詞の第二項を作るものとして固定しかかっていると考えられ、複合のしかたは、対等の動詞というよりも補助動詞的に上接動詞に添って、上接動詞によってあらわされる状態が困難であること、又はそれが困惑の因であることを示し、「くしかねる」「くしかぐねる」という語感で用いられているものらしいことがうかがえた。文献にみるこのほゞ一世紀の間の変遷の速度はそれより早い時期、九世紀から十一世紀にわたる期間にある程度の語義・用法の

変遷があったものと推定する蓋然性がきわめて高いものと考えられる。それではその変遷は、自動詞から他動詞への道筋であったのだろうか。

## (六)

今昔物語集以降、中世・近世そして現代に及ぶ「アツカフ」の経過を辿ると、源氏物語→今昔物語集の流れをそのまゝ延長した形で用法の局限・用例の減少という図式がみられる如くである。

中世期の用例は、用例数は極端に減少するが、語義・用法は、中古のそれを踏襲する如くである。傾向として変遷の動向をみれば、語義でいえば、前述(a)、現代語に近いニュアンスの、手動詞としての用例が増え、用法としては、中古に多かった複合動詞の形のもの減少する。室町期のお伽草子に「手あつかい」(文正草子)の語をみるが、「もてあつかふ」「しあつかふ」など、複合動詞の場合も直接、「手」にかかわる動作として示される形が多くなる。

近世にはあらたに「仲裁する」「仲介する」の意が発生している。内容的に中古における(a)(b)(c)の語義がかわせられたような意味であって、派生の過程は(a)↑(b)(c)と考えられよう。

・あひつれあひ牢人はねだりものなれば聞きつけ来ぬうちに是をあつかへ(世間胸算用)

・よもや亭主が扱はぬと申す事は御座るまい(鷹大名)―三百番  
・今はたがひに無やくの戦ひ也、あつかはん(春雨物語)  
日葡辞書には「アツカイヨイル」「クチデアツカフ」「デアアツカフ」「アシデアツカフ」の語があげてあり、中古期の「アツ

今昔物語集の「繰」(山口)

カフ」とほぼ似通った形の用法がまだ存していることが分る。複合語の形式はもうほとんどみられず、わずかに「もてあつかふ」のみのである。

・さまざまの御調度もてあつかひ、琵琶・琴など……

(笈の小文)

現代語ワ行五段動詞「アツカフ」はごく日常的な動詞で「アツカフ」もしくは「トリアツカフ」の形で用いられる。長崎地方の方言では「手でさわる」意に用いるし、中古期の(b)の意味「看病する」「扶養する」などの意味で用いる地方もあるとのことである。<sup>(注)</sup>中古に多くみられた「思」「云」「見」との複合は全く行なわれていない。

この「心から手へ」という大きな流れの中で、ひるがえって、今昔物語集の全六五例の用例を再検討してみよう。(a)↘(c)に分類した「手」「口」で事態とかがりあうという語義には「心」の要素は含まれないものなのか。

今、この六五例の「繰」が用いられている場面に何らかの共通性を求めて整理してみると次の如くである。

・病氣もしくは、それに類する身体的異常もしくは危機……31例  
・殺生・懲罰、勝負、叛乱、災害、奇事などの事件……20例  
・困難、心労、希求、欲求、愛寵、などの精神的危機……12例  
・その他……2例

勿論かかる数値は一応の目安にすぎないが今昔物語集において「繰」が用いられている場面が大むね、何らかの意味の局限状況であり、当事者の心労・傷心・心的苦痛を伴う場面であることは看取できる。(c)取り沙汰、(b)世話・看病などは当然ながら事態に心をまといつかせるような心配りが下敷にあり、(a)の場合にも

主体の心は対象に向けられている。

以上を全体的な流れとして把えてみると、中古、(a)手で、(c)口で、(d)心で、など何らかの手段・方法・形態で事態とかかわりを持つ意味に用いられ、手、口で事態にかかわる時にもそこには事態について気持を煩わす意味が含まれていたものであるのに、次第に手を煩わすことのみを指すようになっていった傾向を看取できる。対象、外的な事態に対し心を煩わす気持をも含みこんだ表現―すなわち自動詞的な傾向の強い語から、対象に対して具体的に働らきかけ「物を動かす」「操作する」「処理する」「さわる」などの具体的な行動を示す明瞭な他動詞への流れであると明らかにいえる。

今昔物語集の「縁」の語義・用法として前に分類した(a)～(e)のうち(d)～(e)はきわめて自動詞的な傾向の強い、事柄に対応して自分の心情に焦点をあてた語義をもっている。その心痛はおおむね、異常、非常の極限状態に対する心痛・傷心であるが、そういう苦痛をひきおこす事柄が自分自身の身体的病苦などではなく、他の外的な対象である点、他動詞として機能するのであるが、なお自動詞的な要素の強いものであると考えられる。すなわち(d)～(e)の語義・用法は、上代にみた自動詞「アツカフ」が苦しみの要因を身体的苦痛のみならず精神的なものに展げていった結果、それが他にも及び、苦しみの因が他に求められていった他動詞化してゆく過程で、まだ十分に他動詞になりきっていない未熟な他動詞、自動詞から他動詞へのいわば脱皮の中間にあるような語義・用法と考えることが可能である。

自動詞から他動詞への過程で苦痛・心労の因である他への心のかかわり方から(b)看病する(病人)、養育する(幼児)そして一

般に世話をするの意があらわれ、一方では、他を案じてあれこれと取沙汰し評定し噂する(c)の意も生じ、その結果、他のものに口を出し、手を出して仲裁するという江戸期における語義が派生し、心の面・気持の面・精神の面の表現性を失なっていくて、現代語の他動詞「アツカフ」が発生していったと考えられる。

自動詞から他動詞への過渡的な時期において今昔物語集には「アツカフ」に未だ自動詞的な(d)の意味、それが派生した(e)の用法がみられたものであろう。一方「ワヅラフ」は「思い苦しむ」の意をもって上代から安定して用いられ、今昔物語集にみた「縁」の(d)～(e)用法はこれと一時期接触したものと思われる。この「アツカフ」、いわば自動詞から他動詞へ変身しそこねていた「アツカフ」が、複合動詞第二項として用いられるとき、「ワヅラフ」と同様の意義・用法となり、今昔物語集の中で「思縁」「思煩」が同義で位相の差があるかの如き感を与えたものであろう。他動詞性をはつきり獲得した(b)～(c)そして(a)の「アツカフ」は他と複合する場合にも、同義的な意義を有する語と反復的に複合し、上接動詞の意味をつよめ又は明瞭にする形で機能している。上接語のいかんによってこの自動詞から他動詞への移行は遅速さまざまながら次第に進行していったわけである。今昔物語集にみる「縁」は自動詞から他動詞への過渡の姿である。

右の如く、中古期にみられる「アツカフ」の用法のゆれば、自動詞から他動詞へ転換する過程に生じた現象である。そう考えて、上代語「アツカフ」から現代語「アツカフ」までの用例を思いうかべてみると、「アツカフ」が自動詞と他動詞の間をゆれ動き、たゆたいつつ他動詞へ行き着く姿が鮮やかに見えてくる。「アツカフ」は本来、「病熱に苦しむ」意から、原因はともあれ

激しい苦しみや悩みを示す精神の表現の語であったものが、中古期に一般の「世話をする」という、いまだ心情に重みのかかった語の用法を経て、単に「処理する」という手の行為、手のみの行為の表現にか変わったのである。

このような、自動詞から他動詞への転換はひとり「アツカフ」のみのものではない。例えば「ワブ」がある。詳述する紙幅をもたないが、現代語においてバ行上一段動詞「ワビル」は他に対してお詫びをするの意の他動詞であり、外へ向かつての行動の表現として用いられている。「ワブ」は、かつてバ行上一段に活用し、失意・失望・困惑など自己の内心の辛さ・苦しさ、佗しさの表現が中核を占める語で、内向きの自動詞的な語であった。そういう気持は本来具体的な行為にあらわさなければ示し得ない、又把え得ない性質のものであるため、次第にその行為・行動そのものに表現の力点に移り、他に対する謝罪行為の表現の語となりかわったのである。これも又、そのゆれ動く転換の様相を同じく今昔物語集の内部にうかがいみることができ。 「ワブ」の場合もいわゆる自動詞的な用法から他動詞的な用法への転換―変身である。

(七)

以上、今昔物語集の「繚」について考察した。「繚」は「アツカフ」と訓じるのが妥当かと思われ、その「アツカフ」は本来上代の自動詞「アツカフ」から転換したもので、「我身の苦しみを苦しむごとく他をも思いやり、心で、口で、手で、それらの事態とかかわりを持つ」という語義であった。「心にかける」「気づ

今昔物語集の「繚」(山口)

かう」というのが今昔物語集における「繚」の意義であり、現代的な語感で把握する、単なる「手」の行為の表現ではなく、それにまつわる「気配り」が、今昔物語集のすべての「繚」に共通してみられる。今昔物語集の「繚」は自動詞から他動詞への移行転換の過渡期に、多分に自動詞的な要素の強い用例がまだ残存する姿である。

日本語の動詞の自他の問題はいろいろに論じられているが、なかなか明確な処理のしにくい問題の如くである。今、「アツカフ」にみた如く、又「ワブ」について略述した如く、動作の方向、内向きなのか外向きなのかという視点から動詞を整理し直してみることが自他の問題について考えてゆく一つの可能性といえるのではないかと愚案してみている。今昔物語集にはかかる問題の手掛りとなりそうな用例を多々見出す。今後を期したい。

(注)

- (1) テキストは、日本古典文学大系「今昔物語集」(一) 山田孝雄・忠雄・英雄・俊雄校注(岩波書店)を用い、本文の引用はすべて同書のページ数・行数による。
- (2) 「大漢和辞典」諸橋轍次(昭30・11、大修館書店)による。
- (3) 「見繚」の用例①と②については、大系本の頭注補記(大系本四、358頁)に、「それぞれ、見るに見かねて・拱手傍観の意であり、文脈上は、相反するが如き用法を持つ。」と注記されている。
- (4) 日本古典文学大系本「今昔物語集」(一)補注四八四ページ。管見によれば、和歌用例は、曾丹集に「のどかにて涼しかりけり夏の日も思ひあつかふこともなき身は」をみるのみである。
- (5)

- (6) 日本国語大辞典の記載による。(b)の意味で用いているのは、秋田・岩手・宮城など東北地方であり、「いじる」「もてあそぶ」の意で用いるのは、九州地方の如くである。

(補記)

第(一)表の分類において、一形式に(a)と(e)のいくつもの項目にわたって用例を見出し、分類の実際が問題になるのは、単独動詞「アツカフ」のみである。今その一九例について、所屬を、巻数・語数・大系本のページ数・行数で示す。

(a)	二四―50、348 ペ2行、二七―24、510 ペ16行、二八―20、86 ペ14行、
(b)	二九―7、150 ペ16行、二九―18、170 ペ4行。 一六―32、490 ペ2行、二六―5、423 ペ15行、二七―24、512 ペ3行、 二七―33、523 ペ8行、二九―24、177 ペ14行、三一―5、256 ペ17行、 三一―5、257 ペ3行、三一―28、296 ペ2行。
(c)	一〇―7、284 ペ2行。 四―8、282 ペ1行、一〇―5、280 ペ1行、一五―22、374 ペ16行、二〇―
(d)	11、166 ペ2行、二六―11、446 ペ6行。